

くろがね

☆ 星海社 FICCTIONS

黒剣のクロニクル

Ta eis hzauton

01



illustration by

しずまよしのり

Yoshinori Shizuma

written by

芝村裕吏

Yuri Shibamura



黒剣のクロニカ 01

芝村裕吏

Illustration／しずまよしのり



Ta eis heauton

Ta eis heauton

01

written by

Yuri Shibamura

illustration by

Yoshinori Shizuma

遙か往古、高度な文明を誇った

アトランティス大陸は、海中に没した。

遺民たちは多島海各地に散らばり、

幾多の都市国家を建設した。

嘗ての文明の精華は大凡喪われたが、

市民たちはその僅かな名残として、





終章 ひとまずの結び 223

第六章 決戦 191

第五章 前哨戦 143

第四章 民会 093

第三章 使者 063

第二章 金と命の使い途 031

第一章 この世は敵ばかりだ 009

水鏡から真の姿・真の力を
引き出すことを未だ憶えていた。
これは、そんな時代に現れた、
叡智ある少年の記録である。

クロニカ



第一章

この世は敵ばかりだ



Ta ris heautou 01

太陽が何もかもを白くするように、強く照り付けている。光の暴力、とまでは言わないが、この地では太陽神の人氣は低く、神話でも人々が喜ぶような役柄は与えられていない。つまりは半ば悪役といったところ。

太陽の光が強いで、目の前には海が広がっているというのに大地は乾いている。植物も乾いていて、火をつければ簡単に燃え上がってしまいそうだ。

それで、海を背に広がる麦畑に火をつけた。陽光が強くて見えるか見えないかくらいの地味な火だが、そのうち暴れだすだろう。あたり一面に燃え広がるのを楽しみに、そっとその場を離れた。

楽しい、楽しい。ざまあみろ。コフススめ、死ね、苦しめ。

表情を変えずにそう思ったつもりだったが、畑から一步出たところで二番目の兄と会ってしまった。

綺麗な顔をした、太陽神によくたとえられる金色の髪をした兄だ。僕より二つ上で、この時一〇歳。名をオウメスという。光り輝くもの、という意味だ。

お付きを連れた兄は目を畑にやったが、冷たい目で僕を見ただけで何も言わずに去った。楽しい気分は一転、暗い気分になる。家に帰ったら、父に殺されると思った。いや、だが、火事に気付かれてない可能性もある。家に帰らなければ、逆にそのことから犯人が分かっ
てしまうかも。

悩んでいたら暗くなってきて、慌てて家に帰った。家の中は大騒ぎで、とてもではないが僕に構う暇なんてなさそうだった。

父が怒鳴っている。自分に向けられた怒りではないのに、身体が固まる。僕は怒鳴られるのが怖かった。昔母に向けられた怒りを見て、それからずっとそうだった。

「農園を管理している奴隷を殺せ」

父がそう言っているのを見て、身が震えた。農園の奴隷頭は僕の母の父、つまり僕の祖父だ。

足が、すくむ。今すぐやったことを告白せねば、僕は祖父を失うことになる。だが怒鳴られるのは怖く、殴られるのはもっと怖かった。

何も言い出せないまま、奴隷頭が殺されたと夕食の時に聞いた。

結局、折檻はされなかった。

あの時どんな気分だったのかは思いだせないが、起きたことはよく覚えている。その日

の夜のうちに、二番目の兄に呼び出された。

覚束ない足取りで兄の部屋に行くと、オウメスは面白くもなさそうに机に向かっていた。羽根ペンの先をナイフで削り、何か書いている。家庭教師に出された宿題だろうか。

「つまらん悪戯だな。お前には独創性というものがない」

気付かれていた。こんなことなら、いや、こんなことにならなくても父に申し出て、祖父を守るべきだった。死は安らぎで怖くはない。でも怒鳴られるのは怖い。だから、言い出せなかった。それが悪かったか。

涙を落としたが、兄はなんの表情も浮かべなかった。

「こういう時はあやまるものだぞ。フラン」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「馬鹿は役に立たない。今後は勉強に励め」

兄は立ち上がって帯を緩めると、自らの服をめくりあげた。年齢不相応の大きな竿で、表面は赤黒く、美しい兄の顔とは全く違っていた。

「舐めろ。歯は立てるな。そしてこれからは、僕のものとして忠勤にはげめ」

僕は五年も前の記憶を振り払って、書石板に本日の課題を書くことにする。二番目の兄オウメスのお下がりで、宿題が僕の課題になっている。

これで兄が宿題をさぼるようなタマならどうにでもやりようはある気がするのだが、ところがそうはいかなかった。兄は兄で、きちんと宿題をやっている。意味が分からない。いや、意味は分かるが、分かりたくはない。僕に勉強させようというわけだ。最悪だな。羊皮紙ようひしの巻物を広げて幾何きかの問題を読み、書石板上に証明を書いていく。

多島海最新を謳うたう幾何は先鋭化が進んでいて、線の太さはないものとして扱うようになっていた。そちらのほうで計算上は邪魔が減っていいのだが、実用上はどうなのだろう。たとえば土地問題の裁定において、境界を仕切る縄の太さを無視したら、それこそ寸土すんどを争う農民たちから非難を浴びることになるだろう。忘れず別途計算すればよいのだが、教育段階からこれを省くのはどうなんだ。

父が金にあかせて呼んだ今度の家庭教師は優秀だというが、学問所の中だけで優秀では話にならない気がする。

まあ、いいだけだね。僕としては、家庭教師が無能でも何の弊害もない。

ああ、でもどうせ解くように強要されるんだから、問題は面白いほうがいい。その点、今回の教師は悪くはない。難しくはあるが意地悪ではないし、考えの異なる解法を許容している。

問題を解き終え、手が動かなくなると考え事が心に浮かんでくる。僕はもう、今日で一三になっちゃった。一三という年齢に意味はないが、祖父を殺され、あるいは殺してか

ら無為に五年間も飼われていると思うと、腹が立つて仕方ない。最高の機会にコフスを巻き込んで自殺してやろうと思っているのだが、それすら上手くできないでいる。

オウメスは優秀だ。いや、コフの支配体制がしつかりしている、というべきか。

雨戸の開いた窓の外を見る。青い空と海が見えるのは当然として、たくさん船が見える。一本帆柱、三列の櫂^{かい}、即ち軍船だ。ヤニア市と小競り合いでもあったのだろうか。

軍船には、櫂を握る奴隷が戦士よりはるかに多く乗っている。櫂一本に三人の奴隷が使われる。一列一二対、三列三六対の櫂があるあの船には、二一六人の奴隷が乗っている計算だ。その軍船が、視界から見えなくなるまで列を作ってこちらに向かって移動している。まったく莫大な数の奴隷で、国力も家の力も大体は人間の家畜である奴隷の数で決まった。つまりあんなにも軍船を持っている我がコフ市は、それだけの国力を持っているというわけだ。呪われてしまえ。

コフに限らず、多島海はどれも奴隷の数が国力となっている。例外はないと言っている。どこの国も、奴隷の確保のため、戦争を繰り返している有様だ。

戦争をすれば勝つ国があり、負ける国がある。母方の国は後者だった。コフと戦争し、そして負けた。二度と耕作できぬように畑には塩が撒かれ、国民は赤ん坊まで根こそぎここコフに連れて来られた。国は滅亡し、今はコフの戦勝記念碑の中にしか名前は残っていない。

僕の場合、父親は貴族だったが母親は奴隷だった。

混ざって平民になるならよかったのだが、コフススからすると血というのは混ざらないものらしく、僕は貴族の子と、奴隷の子、双方の扱いを受けることになった。

つまり、父のいるところでは貴族の子として坊ちゃんなどと言われ、父のいないところではバツタと呼ばれて蔑^{さげす}まれた。

バツタ、うまいと思うんだけどな。

そもそも僕がバツタと呼ばれるようになったのは、僕をバツタと呼ぶ人々が食事をくれなかったためである。ひもじく、とはいえ見渡す限りずっと広がる麦畑に実った麦に手を付けば殺されるので、それで僕たち母子はバツタを捕まえて食べていた。

それで僕をバツタ呼ばわりするんだから、たまったものじゃない。それでも小さいころは、あまり気にもしなかった。奴隷の境遇は悲惨だが、実際に奴隷をやっていると、慣れてしまつてあまり悲惨という気分にならなくなってくる。それどころか、かえって小さい幸せに気付くようになってしまふものだ。今日は鞭^{むち}で叩かれなかったとか、今日も生き延びたとか、バツタが多く獲れたとかだ。僕もそうだった。八つまでは。

ところが奴隷の母が、父に撲殺された。僕が父の前で粗^そ相したからだというが、それは

とってつけた言い訳だと思う。なにせ覚えがない。粗相とかやらかしたのは父で、やらかされた母は死に、僕は罪をなすりつけられたというのが正解だろう。

書石板、三枚目を書きはじめる。三枚の重さは小娘一人分を超える。気付けば「殺してやる」と書石板にびっしり書いていて、それを見て自分で笑ってしまった。殺したいのは連中か、僕自身か。

鼻歌を歌いながら書石板の文字を消し、次の課題である生物の問題を解く。最近兄のオウメスは授業中、奴隷と称して僕を後ろに立たせて聴講させる。

オウメスは僕を教育して、それで何をしようというんだろう。いや、便利な道具として使いたいのだろうが、問題はどうか使うかだ。父や長兄は僕に教育を与えようとは思わない。つまりこっさり使いたいのだろうか。

ああ、嫌だ嫌だ。性処理もそうだが、僕以外を使ってくれないかな。

しかし、この生物の問題は簡単すぎる気がするな。ウニも海綿かいめんも動物で、植物ではない。ドリド木の精はどうか。おっと、これは難しいな。しかし仔を孕はらむというから動物だろう。自信はない。身体から葉が生えているし。うーむ。

考えるうちに呼び出しを受けた。珍しいことに長兄のトウメスだった。こいつは本当に珍しい。僕のことを知ってたんだな。

急いでトウメスの部屋の前に行くと、轟雷ごうらいのような声で「入れ」と言われた。

足が、すくむ。あんなものは声だけだと思うのだが、情けない。

動こうと努力をしていると長兄は奴隷を使わず自分で扉をあけて僕を見ると、鼻息を吹いた。ため息、のつもりなのかもしれない。

「入れ、殺しはせん」

馬鹿にしたような声で言う。はいはい。入りますとも。

「お呼びでしようか」

「当たり前だ！」

怒鳴られて、足が勝手に震える。トウメスはうんざりした顔で椅子に座ると、面白くもなさそうに僕を見た。

トウメスはコフの勇者だ。戦争のたびに大活躍し、よわい齡一九にして既に数百人の戦士を仕留めたという。貴族の子らしからぬ、最前線に立つて戦うところから市民の人気も高いという。

ダリスは怪力。ダリドは僕も知らない。熊かなにかだと思う。鼻は大きく、目も大きい。金壺眼で、髪は銀髪だ。背は異様に高くて父に似ていた。

「お前に仕事を与える」

「分かりました」

即座に答えるとトウメスは眉を少しだけ上げた。

「臆病者だが返事だけはいゝ」

そりゃ断れないからだよ。そう心の中で返事をする間に、トウメスは机の上に乗っている羊皮紙を丸め、自分の指輪で封蠟に印章をつけると僕に渡した。

「バッタ、これを疊天神殿にもっていけ」

つまりこいつは手紙、というわけだ。どういふ内容であれ手紙は貴族の一大事、いいのかなあ、バッタと呼ぶような奴にこんな重要なものを渡して。あんたは知らないかもしれないけど、僕は酔狂な次兄のせいで文字を読めるんだぜ。

「はゝ」

「臆病者だが、お前は俺の弟だ。だからこの仕事を与えるのだ」

「分かっています。すぐに発ちます」

「待て、金を持っていけ」

トウメスは小袋に入れた金を投げてよこした。割に重い。

「成功したらこの二倍をやる。行け」

頭を下げてさっさと外に出る。お金をくれるということは、僕を奴隷扱いしてはいないということだろうか。いや、祖父は安いが賃金を貰っていた。娘の自由を買う金を貯めている、とも言っていた。娘が死んでそれは意味がなくなってしまったが、僕があんなことをしなければ、自身を購入して平民になっていたはずだ。

小袋の中の金を数える。見慣れない国の色々な銀貨が数十枚ある。貨幣の価値は材料と純度と重さで決まるから、この銀貨そのものには問題がない。これが三分の一ではなく全額だとしても駄賃としては高い気がする。貴族の使いとして見てもだ。

やっぱり、奴隷扱いはしてないってことかな。次兄オウメスよりも待遇はいい。戦場の勇者は儲かるのかもしれない。

さて、どうしようか。あるいはどうなるかな。周囲を巻き込んで自殺するにはいい機会が近づいてきている気がするが、もっと被害は大きくしたい気もする。せめてこの家くらはい派手に壊したいが、僕はそこまで我慢できるのやら。

罪の意識は強力で、それでいて死の安らぎは魅力的だ。

自分の頭が勢いよく回転しているのを感じる。

周囲を窺いながら自室に帰り、巻物を潰して懐に入れ、書石板を持って次兄の部屋に向かった。

「フランです。課題を持ってまいりました」

「入れ」

書石板を置きながら、僕は口を開いた。

「手短に。トウメスさまから伝令を依頼されました。これから曇天神殿に行きますので、

お暇をいただきたく」

オウメスは立派なひじ掛けのついた長椅子に寝そべり、頰杖をつきながら少し笑った。家の中ではめったに笑わないこの男にしては珍しい。

「お前は馬鹿なのか。それとも馬鹿のふりをしているのか。破格の金を貰ったはずだろう、あれは私に黙るように示したものだぞ」

「馬鹿のふりをしております」

「なるほど。教育には意味があるらしい」

言い方がどこか自分のようで嫌だと思つたが、表情は隠した。

「持つていけ。中身など見なくても分かる。悟られるな。いい駒を演じろ」

「承知しています」

オウメスに見せることもなく書石板を抱き、僕はまた自室に戻つた後、さほど大きくもない窓から外に出た。普段の粗食がこんなところで役に立つとは。

これで、書石板を持つて行き課題を提出した後、こつそり外に脱出したという格好になる。長兄には、僕は金に目がくらんで次兄を騙した、という風に取られるだろう。

トウメスが窓の外に人を伏せておく程度の頭を持つていればいいんだが。まあ、それもできないくらいなら、オウメスがさつさと殺して家督継承権を奪っているか。つまりは僕は最善の動きをしているというわけだ。

そもそも、普通に考えればトウメスは優秀だろう。間抜けを出世させるために他国が数百の首を長兄に差し出すとは思わない。彼らは鉄貨一枚でも自国の損を許せない性質だ。そいつらを数百も殺せているんだから、長兄は長兄で優秀だ、というわけだ。

貴族は大体において市の郊外に本宅を持つ。それぞれが広大な農地を持っているんだから当然だ。さらに防御を考えて、だいたい崖の上に邸宅を建てる。海から攻撃しにくく、陸からは坂道を上がっていかないといけない。

父の家はまさにそれだった。僕もそこに住まわされている。で、今坂を下りて、都市へ向かっているというわけだ。市街地までは四刻^{一時間}というところ。

午後の風が、気持ちがいい。散歩でもできればいいのだが、まあ仕方ないかと、左右の麦畑を無視して道の上を走った。この時間、農地で働いている奴隷などいないはずなのに、何人か姿が見えるのはまあ、トウメスの仕業だろう。こいつはつまり、僕の監視だ。オウメスはこの時間に奴隷が畑に立つことがないことを理解している。

それにしても随分と手の込んだ監視だが、トウメスがそこまで力を入れて僕を調査している意味が分からない。僕を評価しているようにには思えないが。

コフは半島の先に作られた都市国家だ。マウニア川の河口、良港とはとても言えないような海岸のへこみを、削って広げてどうにか港にしている。

天支神アトラの恵みで見つかった土地に入植したということになっているが、恵みとい

うのは、弱い先住民族がいたということに等しい。つまり先住民族は滅ぼされ、コフは建国された。それが二〇〇年近く前になる。

狭く、密集し、埃^{ほこり}っぽい、そんな市街地に入る。

コフの市街地は貧しい身なりをした奴隷と難民でごったがえしている。コフの市街地なのに、市民であるコフススがいなのは、彼らが戦争以外は全部奴隷に任せているためだ。計算上は市民一人が奴隷一〇人を飼っているという話だから、仮に酔狂な市民が市街地に出てきたとしても、目立たないだろう。

一〇倍という数の差があるのなら奴隷も反乱を起こせばいいのに、建市以来二〇〇年近く、この国では一度も奴隷反乱が起きたことがない。

つまりは一对一〇でも問題ないほどに力の差がある、というわけだ。いまましいダリド、ダリスめ。

奴隷たちは主人に代わって商売をし、荷物を運び、そして売られたり処分されたりしてゐる。

市の真ん中にある奴隷市場には近寄らず、遠回りで進む。急ぎの用ではあるが奴隷市場は気が滅入る。代わって通るのは難民街、つまりコフ市に居着いた難民の家々だ。

難民とは、自分と家族以外に財産がない者、つまり無産階級でさらに国籍が他都市の者をいう。政治的迫害を受けたり、経済的に破綻したり、あるいは戦火に巻き込まれて市民

が流民になって他都市に来たら、それが難民というわけだ。おおむね難を逃れてきた民だから、難民と呼ぶわけだ。

難民は大陸条約で保護されていて奴隷化はできない。受け入れ拒否も原則として難しい。一方で奴隷より幸せかというと、そういうわけでもなかった。何せ仕事がない。どうかすると奴隷の方が生活が楽という状況だ。

あちこちの路地に座り込むやせ衰えた難民たちが、目だけは大きく輝かせてこちらを見ている。一部は僕を見て、にやりと笑う。

僕はこの難民や難民街に暇を見つけては入り浸っていた。貴族の子なので平民の友達はできないし、奴隷の子なので貴族の子供とも付き合えない。奴隷は僕に気を許せない。

でも孤独は嫌だと思えば、こういうところに頼るしかない。

「おーい、フラーン」

気安い呼び声で手を振って三階から降りてきたのは、ウラミという僕より二つ上の人物だ。母方の国の出なのだが、コフと母方の国が戦う前に難民として流れ着いていたので奴隷化されることもなく、ここにいます。最近は血色もよく、痩せてくてもいないのは、彼のダリスが医療の方面で大変有用なせいだった。ダリドを覚醒させる水鏡には市民に限るという制約があるのだが、抜け道として他国の市民でも使えた。難民の中には食うに困って覚醒を選ぶ者が多い。外れなら死ぬことも多いが、彼の場合はそこそこ当たって、それで

商売ができてゐる。医者の手で、結構稼いでゐるとか。

ウラミは浅黒い肌によく映える歯を見せて笑いかけた。僕も笑った。ウラミが本当の兄であればと、思うことはある。

「ごめん、ウラミ、実はお使いなんだ。いつもみたいに遊べない」

「へえ、珍しいもんだな。飼ひ殺しのフランに仕事なんて」

「まったくだよ。自分でも驚いてゐる」

妹が遊びたがつてたぜ、とウラミは別れしなに言った。ウラミの妹は僕と同じ年、男と遊ぶという^{ごへい}と語弊がありそうなのだが、本人を知っている側からすると、文字通りの遊ぶという理解になる。

少し時間を食ってしまったか。

焦りを隠しつつ急ぎ、曇天神殿にあがる。曇天神殿は太陽神殿よりはるかに人気が高い。雲がなければ雨も降らないということで、コフでは曇天神が最高位の神になっている。他の都市国家では別の神が最高神だという。母方のもうなくなった国では、太陽神が最高神だった。

そういえば、貰った銀貨の中に太陽の刻印が打たれたものがあつたな。あれだけ貰って、あとは使うか。

長くくねった階段を抜ける。小高い丘の上に建てられた曇天神殿には市民の姿がある。

奴隷はここに寄ってこないから、目立っているだけ、と言えなくもない。

見事な松の木がたくさん並んでいる中を抜け、石段を登り、四方に開かれた神殿の中に入る。神殿は人間が住むところではないので壁がない。おかげで四方がよく見える。湾を挟んで我が家だっただけに見えるかも。

神殿の上には雲が渦巻いていて、確かに神がおわすことを示している。

それはさておき、手紙は誰に渡せばいいのだろう。神官らしき者も巫女らしき者も姿が見えず、それで仕方なく大声をあげた。

「勇者トウメスの信書を持ってまいりました。取次ぎを」

そう言うのと背後で松の木が動き出した。あ、ドリド^{木の精}だったか。

ドリドの神官は普段木の姿で神殿を守っているようだった。しかしまあ、本当に木々には見えない。

「承知しました。私は曇天神殿に仕える神官のウオホス。手紙をお見せください」

手紙を取り出して差し出す。松の木の列から一本抜けて歩いて来る。確かにこれなら偽神官を配置もできないし、よい考えのような気がする。

神官は封を確認し、目の前で開いて読みはじめた。礼儀に則^{のっと}って僕は恭^{うやうや}しく、しゃがんで待つことになる。

通常神官は返信を書いて、そのまま使者である僕に渡すところだが、そうはせずに口を

開いた。

「すぐにも準備を始めましょうとお伝えください」

「承知しました」

神官は手なのか、枝なのかを振るうと、次々と武器を出現させた。空中に剣が、投げ槍が、槍が、楯が、次々浮かんでは落ちて積み重なる。

この神官のダリスは木製品の出現で、でたらめなことに一部が木製というだけでも問題なく出現させることができるらしい。

あつという間に武器の小山ができるのをじつと眺めていたかったが、じろじろ見るのも失礼にあたるということで、退散した。

まっすぐ帰るかどうか、迷う。馬鹿を演じる身としては帰りはのんびり屋台で買い食いでもして帰るのが妥当だろう。行ったことはないが娼館しょうかんを兼ねた美の女神神殿に行ってもいい。珍しい銀貨はまあ、金の追跡をするためだろうから、せいぜい使ってやらないと兄も落ち着かぬだろう。

とはいえ、市の武器庫を開けるというのは、緊急事態だ。使う予定が至近にあるからああやっているんだろうし、それを急いで伝えないというのは馬鹿が過ぎる気がする。

まあ、仕方ない。馬鹿の演技は後日ということで走ることにする。

走っていると、一本の若木がいつてきた。目を剝くような光景だが、これもまたドリド

だった。

「何か御用ですか」

言外に急いでいるんですがと匂わせたら、若木は長い髪を細い指で絡まぬよう操りながら、こっちに笑いかけた。薄い緑色の肌をしているのはいいにしても、この状況で笑うのはちよつとどうなんだと思う。場所からして曇天神殿の巫女、あるいは修行中の巫女のはずだが。

「忘れものですよ。若様」

「いやいや、僕は若様と呼ばれるような者では」

忘れものとは、木で出来た証だった。神殿に行くと言えぬ木札で、神殿巡りする老人がよく首から下げてじゃらじゃらさせている。

「あー、はい。ありがとうございます」

巡礼ではないのだけど、と思ったら、ドリドの娘は、笑った。

「あなた、今私のことを馬鹿だと思ったでしょう」

足をとめた。

「あー」

あー、ばっかりだな。思考を切り替えて、頭を下げた。

「すみません。すぐと思いました」

「だよねえ」

あきれた風でもなく、若木は笑ってみせる。美しいは美しいが、この木は何を考えているんだろう。

そう思ったら、顔を近づけられた。

「お金、家族のために使わないほうがいいかもね。それだけ」

首に証をかけられた。

じゃあねと言って離れていく若木。僕はその姿を見た。

「名前は？ 美しい松の乙女さん」

「イリユーイリド。イリユーでいいけど」

「ありがとう。この証、大切にするよ」

木札を掲げて見せてまた走ることにした。あの女。なんだ。どこまで何を知っている。落ち着け。金の使い道を指定したあたりは手がかりだろう。おそらく敵じゃない。僕を利用しようとしている敵だろう。それも馬鹿ではない。

この世は敵ばかりだ。敵じゃないなら頭のいい敵だ。それだけでしかない。

まあ、顔は綺麗だったな。

わき目もふらずに走って三刻、大陸競技会に出られるんじゃないかという勢いで戻って来た。

息を整えるか整えないかのうちに、長兄の部屋の前に立つ。

「戻りました」

「入れ」

長兄は外征ばかりで家にはほとんどいない。それで居室の中には個人のひととなりを感じさせるようなものはなく、ただ使い込まれた鎧や楯だけが、個性らしきものを見せていた。

女の匂いもしないというのは、驚きですらある。何をしに帰って来てるんだらう。

長兄トウメスは椅子に座って太い腕を組み、こちらを見ている。

「早かったな」

「ええ、まあ。急いだほうがよかった気がしたので」

「まあ、そうだな。しかし、急ぎすぎだ」

「そうですか？」

「せっかく窓から抜け出したのに、走って帰るところを見られたら台無しだ」

そう言いながら、トウメスは太い顎を揺らして笑っている。愚かとは思うが可愛げはあるとか、そういう考えだろう。まあ、こういう人は単純果断な人間こそを愛する。

「それはそうなのですが、オウメスさまとて、この件については協力するでしょう」

長兄は否定も肯定もしない。

「だいいいがな」

「神官はトウメスさまの手紙を受け取ると武器の生成をはじめました」

「市の武器庫がああなっていることを知っているのは、市民だけだ。さほど重要な秘密でもないが、言うなよ」

「はっ」

それで、下がった。長兄はあれで律儀な人物らしく、きつちり二倍の銀貨を寄越した。

家具一つない自室に戻り、トウメスが何を考えているのか、若木のイリュイリドが何を考えているのか、考察する羽目になった。トウメスはどこと戦おうとしているのか。外か、内か。内だとすれば、誰が敵か。

周囲を巻き込んで自殺するには、そろそろいい頃合いかもしれない。顔が緩む。外の敵と戦う直前、曇天神殿のあの神官を殺すとかどうかな。いや、それで武器が消えなかったらあまり意味はないな。いっそ奴隷や難民を指揮して武器を奪うのはどうかな。駄目か。奴隷はある意味生活が安定しているし、難民は……難民を巻き込むのは趣味ではない。

降って湧いたような話だけど利用するのは難しいなあ。

まあ、もう少しだけ死ぬのを先延ばしにして、機会を待つか。とりあえず今回は長兄との顔繋ぎと考えて、それでよしとしようか。

第二章

金と命の使い途



Ta ris heautou 01

翌日になって、金を使うことにした。

若木のイリュイリドの話では、家族のためには使うな、という。兄たちのために金なんか使うわけもないから、あの忠告は意味がない気がする。いや、違うか。兄を殺すための武器を買うのはやめろってことかな。兄を殺すのはとても楽しい想像だが、現実的には難しい。特にオウメスは、悔しいが殺すのは無理だ。僕自身の屈辱を晴らし、名誉のためにどうにか殺したいとは思うけれど、方法を思いつかない。

今のところオウメスに対し、僕ができる最大の嫌がらせは自殺することだ。頑張って僕を教育しているから、それが無駄に終わったとすれば、それはまあ、不満だろう。ざまあみろ。

家族のためねえ。父を殺すのはオウメスがやるだろうから、僕としてはほうっておけばいい気はする。鉄貨一枚も払わないでいいだろう。まあ、これまで祖父も母も殺しているし、もう一つくらいは親族殺しの罪を得たい気はするけども。

しかし、どう考えても家族のために金は使いようがない。普通に考えても、斜^{はす}に構えて考えてもだ。

考えすぎか、それとももう一段深い話か。

寝転がって、昨日ウラミと遊び損ねたなと考えた。妹とも。

そうか。この場合は家族というより、監視がついていると解釈すべきなんだろう。

二人のために金を使うと、いけない。まあ、銀貨が珍しいからそこから足がつく、というところか。最初から怪しいお金だったから、母方の国の銀貨を除いて全部くだらない使い方をするつもりだった。だから、いらん心配だったな。

いや、ウラミを誘って散財する可能性はあったから、役に立つ忠告ではあったか。今度、折を見て礼をせねばなるまい。

んー。しかし、ウラミに金を使うなどはどういうことだろう。僕がウラミを使ってなにかやらかすと、長兄トウメスは警戒しているのかな。

警戒されてウラミや妹の慎ましい生活が壊れるのは嫌だな。ほとぼりが冷めるまで二人との連絡を絶つか。残念だ、いい友達だったのに。

妻殺しの子で祖父殺しにして近親相姦で強姦被害者の、こんな自分でも悲しくなるものだとしんみり思った。自殺するときはこんな気持ちで死にたい。いや、駄目かな。ウラミを悲しませちゃいけない。

いづれにせよ、監視の厳しいここでは何もできない。せいぜい静かにしておこう。

金はどうしようか。美の女神神殿かな。

散財するため外出の機会を数日待っていたら、課題もないのにオウメスに呼ばれた。

「市街地で難民が反乱を起こしたらしい」

イリューイリドの忠告から予想されてしかるべき話だったが、意外は意外だった。

「お前は難民街に入り浸っていたな」

「はい。でも、反乱する予兆なんてこれっぽっちもありませんでしたよ」

これは正直な感想だった。そもそもあんな痩せっぽちの連中で、どうするんだ。

「だろうな。でなければ、危ない橋は渡るまい」

オウメスはそういう理解だったが、長兄トウメスは同じ考えではなかったらしい。なるほど。僕が仕掛ける方ばかりを考えていて、難民が仕掛けるとは思ってもいなかった。

「不思議そうだな」

オウメスは面白くなさそうに長椅子に寝そべって言った。僕は頭を掻いた。

「ええ。まあ。だって彼ら、武器も持ってませんよ。痩せこけているし。勝つ見込みがあるから戦いを仕掛けるのが普通だと思います」

オウメスは苦笑した。

「その通りだ」

もしかしたら、戦いを仕掛けたのは長兄というか、コフススなのだろうか。よくわから

ないな。難民を平らげて貴族が得するとも思えないけれど。

オウメスは僕を観察しながら口を開いた。値踏みするような目をしている。

「どう思う」

「トウメスが仕掛けたと思います」

「誰に仕掛けたんだ？」

分らないと言いかけて、オウメスの美しい顔を見た。

「オウメスさまを狙って？」

「多分な」

半分僕にも血が入っているとはいえ、本当に呪われているな。この家系。

うんざりしていると、オウメスはぞんざいに手を振って僕を遠ざけた。用事は済んだ、という顔。

自室に帰り、兄弟喧嘩で難民を巻き込むなよと、一人腹を立てた。ウラミ、妹、無事でいてくれ。

長兄に貰った銀貨などは、僕と反乱難民が繋がる証拠になるはずだったんだろう。ところが僕が帰りに難民街に寄らず、その後も難民街を避けていたせいで、あてが外れたというわけだ。あてが外れたのなら外れたで次の策に移ればいいのに、トウメスは馬鹿なことに難民に戦争を仕掛けてしまった。

「どんだけ馬鹿なんだよ。」

数瞬考えて、まあ、今日死ぬかと考えた。ウラミや妹、難民街で僕に笑顔を向けてくれる人々、彼らが生き残るのに少しでも手伝いができるのなら、僕は死んでいい。

よし、難民街まで走って生き残りを探し、助けられるだけ助けて脱出させよう。怒鳴られて脚が^{すく}竦まないことを願うまでだ。そのあとは、そうだな。捕らえられたら、オウメスの罪があることないことを告白してもいい。いいぞ、難民を幾ばくか助ける上にオウメスに復讐できるじゃないか。

窓の外を見る。青空、太陽、綺麗な海。

今日は死ぬにはいい日だ。

そう思ってドアを開けたら、五、六人の奴隷が立っていた。オウメスの奴隷だった。

振り返って窓から逃げる。一瞬だけ僕が速かった。おかげで窓を抜けられた。しかし、そこまで。外にはオウメスと、長兄にも劣らぬような大男の奴隷がいる。

僕は奴隷に押し倒され、オウメスに顔を踏まれた。

「敵の狙いはそれだ。馬鹿め」

「友達を助けて何が悪い！」

「貴族に友人はいない」

僕は貴族じゃないと口にしたら、顔を踏みつけられたまま、意識が落ちるまで首を奴隷

に締め上げられた。何時間経ったのか目が覚めれば、自室に転がされていて、窓には板が打ち付けてあった。

ドアの外には奴隷が二人。僕は呪詛じゆその声をあげて床を叩き、泣いてウラムの無事を祈った。

難民街の半分が焼けたと聞いたのはさらに数日後のこと。ウラムらしき人物が勇敢に戦って死んだと聞いたのは、さらにその翌日のことだった。

そんなことが起きて、性格がねじ曲がらないわけがない。

僕は自分でも笑ってしまいうほど性格がねじくれた。ねじくれるどころかねじ切れたらよかったのだが、どんなに酷いことが起きて、悲しいことが積み重なっても心労では死なないらしい。

あるいはあれか、僕はウラムや祖父の事を、大して好きではなかったのかな。

笑いが止まらぬ。ひとしきり笑った後は、死にたくなる。もはや誰とも友人にならぬ、誰とも深くは付き合わぬ。自殺はする。だが、その前に、コフスも、トウメスも、オウメスも、父も、神官も、あの日難民街にいた全ての兵士も、一様に殺してやる。それまただの殺しで僕が満足すると思うなよ。思いつく限り最低の殺し方で殺してやる。

しばしの後、にこやかに笑いながら、家庭教師の先生の見送りに行く。二年と少し我が

家に仕えてくれた、オウメスの後ろに控えていた僕の先生。

人馬は博学というけれど、ジジウム先生は特別に博学だった。あの姿で海の生物にも詳しい。どういう形で知識を得たのか、知りたいと思いつつ、この日を迎えてしまった。

オウメスは薄情にも先生の見送りなどせぬらしい。僕はオウメスの使者という名目で、先生を見送ることにした。

厩舎を改造した先生の家、その前に先生が荷物を背負って、佇んでるのが見えた。駄馬じゃないんだからそういう格好しなくても。

「先生！……じゃない、オウメスさまの先生」

先生は目を瞬かせた。もういい歳のはずだが、体はしっかりしているし、眠そうな顔と白い髭以外は老いを感じさせる材料もない。

「おお、君はいつも若様の後ろにいた……」

僕は近づいて頭をさげた。

「フランと申します。ジジウム先生。オウメスさまから見送りを命じられてまいりました」
ジジウム先生は妙な顔をしたが、直ぐに笑って頷いた。

「荷物をお持ちしましょう」

「いやいや、構わぬさ。これで」

「先生ほどの賢者にそんな……」

「駄馬みたいな恰好と？」

冗談めかした顔で、そんなことを言う。僕はいえいえいと手を振った。

「まあでも、当家があまりお金を出していないのなら、由々しき問題ですけども」

「大丈夫。たんまりもらったさ」

僕は微笑んだ。

「それはよかった」

ジジウム先生も笑った。二人で並んで領地の端を目指した。貴族としてはまあまあ程度の家とはいえ、端まで行こうとすると六刻はかかる。

二人でとぼとぼ歩く。あれ、馬に乗って来たほうがよかったか。でもなあ。

「馬で来たほうがよかったとか思っているかね」

「いえ……まあでも、先生に気を遣わせているな、とは思いました」

「徒歩でいいのさ。人馬からすれば馬の上に乗るっていうのは、いい気持にはならんよ」

「あ、そうですね」

奴隷の興^こみ^じたいなものかな、と思った。確かにまあ、自分で歩けばいいのに、とはよく思う。

ジジウム先生は、家畜全般に否定的なようだった。直接聞いたことはないが、言葉の端々からそうとれる。馬もそうだが、人の家畜である奴隷を使うのも、好きではないらしい。

そういうところも気に入っていた。先生が辞めるのは残念で仕方ない。

「私には優秀な生徒が二人いた」

唐突に先生が話し始めた。僕は考え事をやめて意識を先生の話に集中した。

「一人が若様……すなわちオウメスさま」

まあ、そうだろうなあ。

「それでもう一人が君だ。フランクくん。名前はついさっき知ったがね」

「僕ですか!? 僕はただのお付きで」

「まあ、形の上ではそうしようと努力をしていたな」

お見通しだったか。僕は頭を下げた。

「すみません。授業料はお支払いします」

「いや、いい。若様というか、オウメスさまにも貰ったからね。二人分だと、これ以上貰ったら貰いすぎだ」

へえ、オウメスめ、たまにはいいことするじゃないか。指の一本くらいは残して殺してやろう。

「ありがとうございます。でも僕はあんまり優秀ってわけじゃ」

「優秀だったさ」

麦畑を右に、海を左に、僕たちは歩く。先生は唐突に脚を止め、目を細めて口を開いた。

「ところでフラン君。海を見たまえ」

「はう」

僕は海を見た。茫洋^{ぼうよう}と広がる内海は、いつも通り静かだ。

「今までずっと、二人に教えてきたが、今日は君一人に課題を出そう。この大地の形はどうなっているかね」

「半球形になっていると思います」

「どうしてそう思う？」

先生の質問に、僕は頭を掻いた。

先生が質問するからには世間一般の認識である平面上の世界という形にはならないだろうと思ったのが第一にあるのだが、それを理由にあげても先生は喜ぶまい。

「そうですね。遠見のダリスを持つものが見ても、地平線の向こうにいる船は見えぬそうです。つまり船が見えないのは距離の問題ではなく、おそらく大地の形ゆえなんです。海なのに大地っていうのは変な気がします」

「世界、というのだよ。地と海をひっくりるめ、地平線の向こうまでを範囲にした言葉さ」

「便利な言葉ですね。今後使わせていただきます。あーと、世界の形が、それがどうしたんですか？」

話が見えない。先生は青い海を見ながら目を細めている。

「世界の大きさは分かるかね」

「知識としては知りませんが、測ることは出来ると思います。無限遠にある太陽か星を用いれば角度から丸みを計算できるはずです」

「太陽も星も位置を変えるだろう」

「年に一度、太陽は必ず同じ軌跡を通ります。それを利用すればいいだけです」

先生は満面の笑みを浮かべた。

「完璧だね」

そりゃどうも。と言いかけて、先生の目が悪戯でもするように輝いているのに気付いた。おいおい、まだ続きがあるのかな。そいつは楽しそうだ。

「もしかして、実際測ったとか」

「それは今からさ。金もあるしね」

しれっと先生は言ったあと、僕を見た。

「ところが船乗りが言うには、地平線の向こうにはまた地平線があるらしい」

「そりゃあ、半球形していればそうなんじゃないですかね」

「私は東の地の生まれだね。多島海を包むアトランの車、さらにその東に接続する東の大陸にある」

世界は広いなと通り一遍の事を思ったあと、僕は先生の言いたい事を予測した。

「あー。先生はつまり、地平線の向こうの向こうの向こうの、そのいくつか向こうから来ているわけですね」

「そうそう」

「世界の丸みについても計算されているわけですね」

「もちろんさ。ずっと前にな。あとは実測するだけだ」

僕は海を見直した。アトランの車の先の海には、波、というものがあると先生に習ったことがある。

「もしかして先生は、落ちてしまうようなところから来ちゃってます？」

「計算上はな。世界は半球形ではない。どういう仕組みか分からんが、世界は丸く、反対側でも落ちたりはしないようになってる」

僕は大喜びした。なんだって。おいおい、そりゃ随分と愉快な話だな。

先生は笑っている。さすが先生、最後の最後まで隠し球を持っておられる。

「よく気付いた。さすがはフランくん。私の弟子の中でも一番優秀だ」

嬉しいことをおっしゃる。ひねくれ者でも、笑顔になっちゃうよ。

「オウメスだってこれくらいは気付きますよ」

「気付くかもしれんが、彼の場合は世界の果てまで征服しそうでな」

「あー」

確かに僕も、そんな気はする。

「知識や発見を、ただの知識や発見として持っていることは、とても大切なだよ。世の平穩のためにね」

オウメスなら、その何が役に立つんだと冷たく言うだろう。僕は違う。奴隷の管理の仕方を知っていても、使ったりはしない。貴族の作法だってそうだな。なるほど。

「分かります。ですよね」

先生は朗らかに笑った。

「最後に君と話せてよかった。聞けば奴隷ではないというじゃないか」

「ええ、半分は。母は奴隷ですが、父は貴族です。つまり僕はオウメスの弟ですね」

「そうか」

目を閉じてジジウム先生は考えた。

「君は世界の果てを見たくはないかね。世界一周ができるかどうか、私はやってみようと思うのだが、優秀な助手が欲しくてね」

僕は海を見た。綺麗な青い海。アトランの車の外の波のある海、まだ見たことのない国や生き物。

夢みたいな、夢。

「先生、オウメスから釘をさされていませんか。ああ見えて彼はケチなので、僕を手放し

たりはしないでしようし、必要なら追っ手を出して先生を殺すと思います。だから駄目ですよ。それに僕は魂から穢けがれていますし、罪にまみれてもいます」

僕は笑って首を振った。涙が出た。僕はひねくれ者だ。今までにないほど高く評価されたのに、泣いてるとは。

「でも、先生にそう言ってもらえたのは嬉しいです。ありがとうございます」

「そうか。あるいは馬の脚なら逃げられる、と思ったのだが」

「コフの貴族は殺す、殺されるについては非常に優れています。お気を付けください。関わらないのが一番ですよ」

僕は先生の差し出した手を取った。涙よ、止まれ。

「先生のおかげでいい夢を見ました。ありがとうございます。もし何かお困りのことがあれば、そしてその時僕がまだ生きていれば、可能な限りの助力をします。どうかお元気で」
先生は小さく肯くと、青空を一瞥いちべつして歩き出した。

「その言い方ではすぐにも死にそうだが、およしなさい。死なせるために私は知識を与えたのではない。むしろ逆だ。生きるために知識を与えたのだ」

「それでいて知識を濫用らんようせず、世を平穩に、ですね」

先生は頷いた後で、僕を見た。

「フランくん、よく覚えておきなさい。人も精神も、穢けがれるとすれば、それは自らの行い

によつてのみだ。他の何を以てしても、精神は穢れたりほしない」

先生は慰めてくれている。ずっと事実や真実を教えてこられた先生のただ一つの嘘だろう。僕は頷いて、ありがたく嘘を受け入れた。正確には先生の真心を胸に刻んだ。

畑が途切れたら、もう領地は終わりだ。領地の境界を示す石碑の横で、先生を見送る。先生の姿が遠くなる。

先生の姿が見えなくなるまで頭を下げて、僕は自分が泣くのを許した。これは泣いていいだろう。なぜなら僕は機会さえあれば世を平穩から叩き落とし、兄を殺し、父を殺し、コフスを全て殺し、曇天神殿に火を放ち、糞神官どもが踊りながら燃え尽きるのを眺めるのを心から願っているからだ。

ジジウム先生はあんなに僕を可愛がつて評価してくれて、希望まで与えてくれたのに、どれだけ僕は悪いのだろう。僕が教えを破るのは間違いない。この点オウメスと違いは何もない。兄弟だもんな。あははは。

薄情なことに涙はすぐになくなった。表情を消し、境界の石碑に背を向けて歩き出す。オウメスはもはや勉強などいらぬという考えなのかもしれないが、僕はもつと高名な師の下で勉強したかった。役に立つ勉強もしたいが、役に立たない勉強もしてみたい。世界が丸くて、なぜ反対側では落ちないのか、その力の仕組みを解き明かしてみたい。役に立たない？ いいじゃないか。僕の人生みたいだ。そりゃ惹かれるだろう。同病には親切と、

この地では言う。

二年前の銀貨が使いもせずにあるから、あれを使ってもいいかな。問題は先生を雇ったら、オウメスがなんと言うかだ。あいつに話しかけるのも嫌だが、さて……。

嫌なことばかりを考えている自覚はある。性格がひねくれているんだから当然だ。ジジウム先生は、今頃ヤニア市街まで辿り着いたろうか。

少し微笑んだ後、やっぱり僕は楽しいことなど考えないほうがいいなと思った。苦しみ、悲しみ、友人なし。いいじゃないか。僕らしい。

屋敷に帰り着くと、中庭に馬が大量に入れている。長兄トウメスが帰って来たらしい。また生きて帰って来たのは大変残念だ。今回は傭兵として遠征していると聞いていたんだけど。

屋敷に入ると、長兄トウメスが玄関先の広間にいた。そして、僕を見て大声で呼んだ。表情を消してトウメスを見る。一五で勇者と呼ばれた彼は、今や多島海でも高名な勇士となっている。軍に加えれば箔はくもつくと、遠くの市から傭兵にと呼ばれ出されることもある。コフといえど毎年戦争しているわけではないから、兄にとってこの呼び出しはありがたい話らしかった。戦争狂め、呪われる。

「お呼びでしょうか」

「なんだその言い方は、相変わらずオウメスに奴隷のように扱われているのか」

表情に困っていると、トウメスは笑った。

「腹は違うとはいえ、弟に酷いことをする」

「おやおや、どういう風の吹き回しだろう。」

僕は周囲に兄の腹心しかいないことを確認した後、口を開いた。

「過分なお言葉です」

「俺はオウメスとは違う。二年前の使いの件、忘れていないぞ。お前は勇氣も知恵も足りぬが、少なくとも誠実ではあった」

その誠実さにあなたは虐殺で返したんだけどな。そう思っていたら、話が妙なほうに転がった。

「今日の夕食は俺とともに食おう。オウメスも呼ぶ。そこで一言、言ってみよう」

二年たった今頃？ 今度はまた、何をやらかす気だ？

夕食と一緒に食べてもうまいわけがない。とはいえ、断ることもできない。こういう手合いは、よくしてやったらと自らが思っている時に、いりませんとか言うとか、憎しみに燃える。

それで、笑顔を浮かべた。また罪を重ねた気になる。

「ありがとうございます。でも、トウメスさまとオウメスさまが喧嘩にならぬ方が嬉しいです。なんと言っても、兄弟なのですから」

「ああ、そうだ。兄弟なのだ。フラン、俺の腕を見ろ」

筋肉ばかりの腕を見せつけられる。それでいて、傷口は数えるほどもない。トウメスが投槍ばかりで戦うという話は聞いたことがないから、彼は本当に強いのだろう。これまでの戦いで、敵と切り結ぶことも数えきれないほどあったらうに、傷をほとんど受けていない。

「すごい腕です」

「違う、色だ、色。俺も、お前も、父も同じ色をしているだろう。同じ血が流れているのだ」

言外に、真つ白なオウメスは違うと言いたいらしい。おやおや、父の体調が悪くなったのだろうか。跡目争いにはまだ時間がかかると思っていたが。

僕は兄の顔を見て涙を流した。オウメスと寝るときに覚えた演技が、別の兄にも役に立つとは。

涙を見せたまま、目を逸らした。

「どうしたのだ」

頭を下げる。

「いえ、忠勤に励みます」

お前が滅びるまで頑張ってやる。ところがトウメスは、勝手にいい方向に考えたか、笑

顔で頷き、僕の背を叩いた。

「何を言う。兄弟ではないか」

部下の前でそんなことを言うとはねえ。部下たちは感動の面持ちおもてで見ている。新しい呪の言葉を思いついたが、それどころではない気もする。

自室に下がって、どういう状況なんだと考える。前に酷い目にあったから、今度は一層注意せねばならない。まあ、今度は守るものなんて一つもないだけだね。ただ、奴を喜ばせる事だけは、嫌だ。騙して喜ばせるのはありでも、それ以外は嫌だ。

状況を分析し、最善の動きを考えないと。

まず、トウメスは僕を味方に引き入れることにしたらしい。これは間違いない。

すっかり摩耗まうした書石板を取り出して、課題よりはるかに面白くない事を書く。昔、僕は勉強が嫌いだったが、現実が勉強よりはるかに悪いことに気付いて、意見が変わった。少なくとも授業では毎日同じ風景、ということもない。打ち付けられて脱出もできなくなった窓を眺めるよりはずっと楽しい。

我に返り、書石板の表面を撫でて、改めて何故なぜトウメスは僕を今引き入れることにしたか、思いつく理由を列挙した。

父の体調がよろしくない。まあ、これはないな。早く死んで欲しい。

オウメスとの関係が悪化した。あるいはオウメスから何か仕掛けられた。これはありそ

う。

傭兵として雇われた先で何かあった。例えば裏切られて、家族の重要性に気付いたとか。人材不足。でもトウメスは僕のことをまるで知らない。勉強していたことも知らない。ということ、一番ありそうなのはオウメスとの関係悪化かな。何があったんだか。それにしても、父が現役でやっているのに後継者争いも何もないと思うのだが、どうなんだろう。

戦争狂のトウメスが難民街を焼き払ってから、コフ市に戻って来たのは四回。今回で五回目だ。正確なことは分からないが、兄弟で接触することはあまりなかったはずだ。にも拘わらず関係悪化とは、どういうことだ。同じ家にいるのに、さっぱり分からない。

やっぱり一人で考えるのには無理があるなあ。ウラムが生きてたら、相談の一つもできただろうに。

くそ、トウメスめ。誓って酷い殺し方をしてやる。

書石板の文字を消して、心を落ち着かせる。

まあ、今日の食事会でせいぜい手がかりを掴んでやるさ。

あとは、トウメスがいる間は呼ばれない限り、オウメスのところに行くべきではない。今はトウメスの味方の振りをしていたほうがいい。

落ち着け。落ち着け。焦りの結果は窓が打ち付けられ、顔を踏まれて監禁されるだけだ。

何をするにも慎重に事を進めるべきだろう。

そう、新しい先生を雇う前にジジウム先生の教えを羊皮紙に書き写すのも手だな。結構な巻数になりそうだが、忘れたときに見直せるし、それくらい金はある。それこそトウメスの金がある。そう、そうだ。それに金を使おう。これならオウメスも文句は言うまい。しばらくして、迎えが来た。数えるほども行ったことのない食堂に、三つの長椅子がある。ということは、参加者は三人。立っていたらトウメスとオウメスが連れ立ってやってきて、何を立っているんだと言われた。

本当に兄弟だけの食事会というわけだ。最悪だな。奴隷が給仕するが皆男ばかり、女っ気もないときた。

女奴隷に給仕させて、気に入ったらおっぱい始めるような趣味を持つ父の子供とは思えぬような質実剛健さだ。あ、長兄トウメスはそういう人物だったか。

貴族の食事会は長椅子に寝そべって行われる。くつろいで食事するという建前だ。僕も寝そべって食事する。長くやっているのと左肘がしびれて嫌な感じがするのだが、皆は気にもしない。

それにしてもくつろぎとは遠い食事会だ。

「我が黒剣家と、その兄弟に」

トウメスが角杯を持ち上げた。置くことは出来ないから飲み終わるまで持っていないと



いけない。僕は葡萄酒が好きではなかった。水で割って飲みたい。

オウメスを見ると、かすかに不機嫌そうにしている。ざまあみろという気分だが、オウメスの鉄壁の笑顔が僕が寝そべっているだけで崩れるとは思えないから、別の理由があるんだろう。あるいは何が起きるのか予想できないから焦れているのかもしれない。それは実にありそうだ。

食事が魚介類中心なのは、庶民とあまり変わらない。小麦をこねて薄く伸ばしたものを竈かまどの内側に張って焼いたピッツ麦タ皿という食べ物皿が豊富に出るくらいが違いだった。

オウメスが肉を食べないので、こういう食事になっているのかも。

おおよそトウメスが他都市の情勢を話しているのに頷く形で宴席は続く。都市国家群の関係は日々流動していて、気をつけていないと危ないという。オウメスには既知きちの話ばかりだったかもしれないが、僕は普段まったく聞かされない話ばかりで、とても興味深く聞いた。それこそ役に立たない、けれどもいいじゃないかという知識だ。

「ヤニアが国力を増大させている」

トウメスは話をまとめるように、しかめっ面で言った。

僕は半分起き上がった。ヤニアと言えば隣市、隣国であり、ジジウム先生が向かった先でもある。

「どうした、フラン」

トウメスはしかめっ面を和らげて言った。

「どうしたって、隣の市ではないですか」

「まだ戦争になるとは決まってるじゃない」

そうか、と寝ころび直した。ならばいいのだが。ジジウム先生が僕の家で家庭教師をしていたことは広く知られている。情報を持っているかもしれないと拘束されていたら、嫌だな。

「フランは怖がりだな」

トウメスは兄貴風を吹かせて笑っている。

「でも、黒剣家の領土と接していますよ」

「ヤニアの陸軍力など大したことはない。むしろ我がコフと同盟を結んで、その優れた海軍力を生かすだろう」

どうかな。国力を増大させた都市からすれば、陸続きの隣の都市なんて喉に刺さった魚の小骨みたいなものだと思うけど。とはいえ、トウメス、ひいては父もヤニアを問題にはしていなさそう。オウメスはどうかな。彼は他人がどう言おうと自分が納得しない限りは調べようとするだろう。密偵を放つくらいはしているだろう。

「それならいいのですが」

僕は笑顔で引き下がった。まあ、ヤニアから奇襲されてコフが減じるなら、それはそれ

でいい。いや、むしろ歓迎だ。できれば直接兄と父は殺したいが。

それにしても本題はなんだろう。そう思っていたら、ついにトウメスが切り出してきた。ところでフランも一五だ。そろそろ水鏡を見せるべきと思うのだが」

とんでもない方向からの一撃だった。まったくこの人物はいつも僕の想像を超えて動いてくる。どういうつもりなんだろう。

「フランは奴隷の子です」

オウメスが静かに言った。

「だが俺たちの兄弟だ」

トウメスが返した。弟オウメスへの嫌がらせとしてはなかなか言うべきだろう。しかし、トウメスは馬鹿なのか。僕に戦力を与えても大丈夫とも思っているのか。

「別に僕はダリスがなくても。トウメスさまとオウメスさまが仲がよければそれで」

僕がそう言うのと、オウメスが睨んできた。こう言えばトウメスがムキになると思ったか。「見たか、フランの真心を。これが兄弟愛というものだ。俺は兄弟として正式にフランを迎え入れたいと思っている」

本当にムキになっている。信じられない馬鹿だ。それともやっぱり父の調子がよくないのだろうか。父がダリスを使えないとなれば、戦力として使えそうな者は誰でも登用したい、という話になる可能性はある。いや、それならオウメスだって嫌がりはしないか。

じゃあなんだろう。

考えていたら、トウメスが空咳をした。難しい顔をしている。

「とはいえ、オウメスの反対は、コフススの多くが懸念することでもある。そこで誰にも文句を言われぬよう、活躍させてから水鏡に引き合わせたい」

なるほど。ダリスの話は餌で、本命は活躍の方か。

「活躍できるかは分かりませんが、僕にさせたいことがあるなら普通に命じて頂ければ……」

「そうもいかん。たとえ兄弟でも、報酬はしつかりと、だ。戦場では金払いが悪いと背中を刺される」

いい心がけだが、できればもっと無能なほうがやりやすい。

僕は首を振って演技した。

「ここはトウメスさまの家です。戦場ではありません」

トウメスは少し笑った。

「そうか。そうだったな。まあでも、水鏡の話は本当だ。お前は勇気がないからダリスを得たところで大したものにはならんだろうが、ともあれそれさえあれば、自分で稼ぐことも少しはできるだろう」

トウメスは僕を見た。値踏みする顔。目つきがあんたの嫌いな弟にそっくりだぜと教え

たいが、黙っていた。言葉を待つ。

「実は使者になつてもらいたい。俺の、いや黒剣家の末弟としてな。行先はヤニア」

先ほど国力が上がつていると言つてた隣市だ。緊張関係でないと言つてたのは、僕を行かせるためだったか。

で、僕が処刑されればトウメスは末弟の弔い合戦と称して勝っている陸軍力で攻め込むわけだ。なるほどなるほど。戦争狂にしてはなかなかの手腕だ。しかもオウメスのお気に入りも死ぬつてわけか。いい話だなー。

そんなに簡単には使われてやらないけどね。僕は笑顔で思った。

「使者ですね。分かりました」

どうせ避けられないなら、喜んで吞む。その上で、逆襲してやる。ジジウム先生の安全を確保した後で、きつとだ。

トウメスは何故か恥ずかしそうにしている。先ほどまで面白くなさそうに話を聞いていたオウメスは、怪訝な顔をしている。

僕も怪訝な顔をしていたかもしれない。演技、演技。

「それでな、フランに頼む使いなんだが、結婚の申し込みなのだ」

本当に予想外に暴投する人だな、この人は。

相手の姫君は、オールドネー嬢というらしい。さっぱり名前を知らないが、運命の出会いを感じたとは本人であるトウメス談話だ。素晴らしく美しく、それでいて慎ましい人物だという。へー、そうですか。

まあ、求婚が断られたら戦争する気なのかもしれない。略奪婚というやつだ。歴史上たくさん例があるし、父も過去、何人もの都市の姫をそうやって手に入れた。時に都市国家を滅ぼして、だ。母もそうだった。滅ぼして奴隷にしてしまえばやりたい放題というわけだ。つまり、小国では美人が生まれるだけで難しい問題になる。もっとも父は、女目当てる戦争をやりすぎて軍費がかさみ、貴族としての力を落としてしまった。今や黒剣家は中くらいの貴族に過ぎない。

しかし、僕にとってはどうでもいい話だが、世の平穏という意味ではよくない話だな。姫君のいるヤニアは父の領土に接している。その貴族同士が仲よくなるとすれば、裏切りを勘ぐられてコフの他貴族から警戒されるだろう。まあ、内紛で滅んでくれればそれはそれで喜ばしいんだけど。

父はどういう反応を示すんだろう。父に報告してないわけではないのだが、この話は普通に考えて特大の火種だ。

夜中にオウメスに呼ばれた。あらあらと思ったたら、案の定、縄紐で腕を繋がれ、宙吊りにされた。足を伸ばせば爪先がつくぐらいにするのが、オウメスの趣味だ。

オウメスは怒り狂っている。

「色目を使って、そんなにあの筋肉がいいとも思ったか」

蹴られる。鞭で打たれる。前髪を掴まれ、顔を近づけられる。

「それとも自由にあこがれたか、フラン」

いや、実のところ自由なんてどうでもいい。欲しいのはただ一つ、復讐だ。そのためになら自由なんて、世界の果てで世界の丸みを調べる自由なんざ差し出してやる。

心の中でそう思ったが、何も言わなかった。また蹴られる。鞭で打たれる。正しい家畜の使い方じゃないな。親から怒られるぜ。あー、あの父親じゃしょうがないか。

僕と血が繋がっているけどな。呪われろ、穢れた家系め。

「何を笑っている!!」

そう言いながら勃起してるじゃないか。

「笑ってはいませんよ」

顔を近づけられた。冷たい顔をしている。

「口を裂くぞ」

「裂いても事実は変わりませんよ」

ついでに、トウメスの使者の件にも支障がある。頭のいいオウメスが、感情に流されてやらかすか、見ものだな。

オウメスは表情を消している。いい考えに取りつかれた顔。

「ジジウムはヤニア経由で移動するのだったな」

「先生は関係ないだろ!!」

オウメスは笑った。

「お前が何を思っているのかは知らないが、あれはそういう者ではない。知っているか、厩舎の前にいくつも墓があったろう。あれはジジウムが突き殺した女奴隷の墓だ。お前の母の最期と大して変わらん死に方だぞ」

縄で腕が傷つくのも構わず暴れる。オウメスの鼻に頭突きをしてやった。鼻血が出ている。ざまあみろ、本当にざまあみろ。

「殺してやる!」

先生も母も、お前が穢しているものじゃない。オウメスは心から快楽を得ているかのよう。凄みのある笑いを浮かべた。

「殺してやるのは僕の方だ。フラン。今夜は何度でも殺してやるぞ」

オウメスは頭突きされて最高に勃起している。縄を引き上げさせ、僕を空中にぶら下げた。

お前が殺すというのはそういう意味かよ。

第三章
使者



Ta ris heautou 01

どんなに最低の時でも明日は来る。

僕は尻穴から高貴らしい精液を垂れ流しながら、殺してやると連呼していたらしい。とつきの昔に氣を失っていたが、オウメスは執拗しつように責め立てたらしい。

らしいらしいというのは、僕の手当てをした奴隷から聞いたことだからだ。

体格のいい奴隷は僕をあざけりながら手当てをした。奴隷のわずかな楽しみの一つは、誰かの不幸だ。奴隷になって皆の不幸を嘆くやつはいない、と大昔に僕が殺した母方の祖父が言っていた。まさに、その通り。

まあ、あの奴隷も殺すかな。いや、この程度で人を殺していたらこの家から奴隷がいなくなる。ついでに言えば奴隷でいるというだけで、随分な不幸だ。母親が奴隷だった僕が言うんだから間違いない。放っておいて問題ないだろう。

背中と尻が痛い。天井を見る。しばらくは動けないだろう。屈辱と痛みに顔を歪ませた後で、オウメスに鼻血を出させたことに気付いた。あれはよかった。初めて人を傷つけられた氣もする。自分は臆病者で度胸がないと思っていたが、怒りに我を忘れれば、どうにかなるものらしい。

あと何回の屈辱を味わえば、あの鼻、あの首を折れるだろうか。そう思えば、我慢もできる気がした。

動けるようになって最初にやったことは、ジジウム先生の宿舎だった厩舎に墓があるのかの確認だった。そんなものはなかった。よかった。

それから二日経って、トウメスに呼ばれた。傷口でも見せて言いつけてやろうかと思っただが、同じ家のことだ。それくらいはトウメスも知っているだろう。知ったうえで僕が動けるようになるのを待っていたに違いない。

「服ができたぞ」

トウメスは僕にそんなことを言った。どこで身体の大きさを測ったのやら。なかなかいい布を使っている。模様の入った麻織物の服だ。着用した上からさらに布を巻き付ける。きちんとした作法で最後は左手の上に垂らす。まあ横幅は随分と立派になった気がする。

「いい見栄えだ。俺の弟としても立派に通用するだろう」

褒め言葉になってないんじゃないかと思いつつ、頭を下げた。

「光栄です。いつ、向かいましょうか」

「今日にでも頼めるか。ヤニアに向かうなら、新月の日でなければ。オウメスのやつには言っておく」

随分急ぎやがるな。

「付き人を出す。貴人は自ら喋ることはせぬから、あとは任せておけばよい」

信用ならないってね。あー、はいはい。

「分かりました。では、すぐにも」

それで、試着がそのまま、旅になった。奴隷の担ぐ輿に乗せられる。最悪だな。これ。尻にも背中にも優しくない。

いつもなら走って四刻の道のりを、のんびりと進む。頭上にははぐれたのか、一羽の白い鳥が飛んでいて、なんだかとても寂しそうに見えた。

それにしても、輿は揺れる。貴族どもがこんなものに乗りたがる理由が分からない。なにより、遅い。さらに、輿のうしろには贈り物を運ぶ奴隷が三〇人ほど続く。

尻の痛みを気にしていたら、ジジウム先生を見送った境界を越えて、隣市であるヤニアの領土に入った。先ぶれが出ているせいかな、兵士が出てくることもなかった。

そろそろヤニア市の中心部が見えるかなと首を伸ばしていたら、下を歩くトウメスの部下が口を開いた。元々は父がつけた古くからの兄の部下で、武人らしい立派な体つきをしている。年齢は五〇にも届こうとしていた。名前はイタデイスという。

「顔を隠してください」

「布で？ 何故？」

「貴人は顔を見せぬものです」

そんな話は聞いたことがないが、僕は言われるままに薄い布で顔を隠した。

息苦しさを感じつつ、輿はごった返すヤニア中心部に入る。人混みはコフと変わることはない。奴隷ばかりなもの、やはり同じ。

都市というのはどこも同じか、蠅が飛び回り、埃っぽくて臭い。

隣の都市国家とはいえ、代わり映えのなさに苦笑が出る。違いと言えば貴族の館が市街地にあることくらいか。よくもまあこんな不衛生なところに金持ちが住むもんだ。

ここが目的地です、と僕の家的一半もない屋敷を指さされる。他の五階建ての建物より低いのは、高層階を他人に貸したりしていないせいだろう。三階建てに見える。煉瓦^{れんが}を使わず、石材を組み合わせて作っているのは貴族風だが、建物の外観は彫刻などなく、質素に見える。円形の屋敷、というのが唯一目を引くところだった。

表からは庭がまったく見えないように見えるが、それでは貴族の務めである軍事指導者の役が務まらないので、どこかにはあるのだろう。

あんまり金持ちじゃなさそうだな、と思いながら一旦素通りし、市街地を望む丘の上の神殿に向かう。

外交使節は最初に神殿^{ちゅう}に詣で、神官に用件を伝えたあとで、目的地向かう。多島海一般ではこうすることで神を第一に敬い、市全土に情報を流すのが常だった。

神殿には情報が集まるので、やましいことがなく争いを避けるのならば、こういう手順

で進めたほうが円滑に進む。特に隣市の貴族との婚姻ともなれば、秘密裏にやれば色々勘ぐられる可能性がある。

この市の最高神は、月の女神だった。曇天神が最高神であるコフと、同じような理由で最高神らしい。つまり昼間が暑すぎるといふわけだ。太陽仕事するな、というのがこのあたりの共通認識だった。

神殿に贈り物として布を贈り、輿を下りて祈りを捧げる。ジジウム先生が無事であるように、ウラミやその妹が地下の国で涼しくやっていますように。あと復讐もやりますんで、どうぞ助力をお願いします。

神話では水浴びを覗いた不埒な狩人^{ふらち}を矢で射殺した女神ゆえ、ご利益がありそうな気がした。

祈りを終えて顔を上げると神官が寄って来る。用向きはすでに先ぶれが伝えているので、話す内容は新月の日に来られるとはよくわかっていらっしやるとか、今年の葡萄^{ぶどう}の出来とか、そういう話だった。麦の出来は戦争に繋がるが、葡萄が不作で戦争になったことはないので一番当たり障りがない話題とされる。

おかげで貴族は、葡萄の出来に妙に詳しい。僕があまり好きではない葡萄酒も、貴族としては日常的に仕入れている知識が役に立つので人気だった。

その後、件くだんの屋敷へ。ここまで二〇刻かかっている。朝一刻から数えてもう昼が近い時間だ。

屋敷の入り口で迎えが来るまでにさらに二刻。狭い屋敷でそんなに時間かかるわけないだろうと思うのだが、貴族の作法としてはもったいぶるのが正式なものなのだ。

なんでつけるのか分らないと思っていた顔の薄布も、こうなるとよいもののように思えてくる。布の下で口を曲げていても外交問題にならない。

うんざりしていたら、通用門が開いてそこから人馬が顔を出してきた。僕を見ている。粗末な細長い麻の布に穴を開け、頭からかぶって紐でまとめている姿ながら、槍を持っているところからして戦士なのだろう。普通運動は全裸でやるから、彼女もそうなのだろう。若駒という言葉がしっくりする元気そうな見た目。栗色の髪は長く、馬の尻尾のように頭の後ろでまとめている。

胸のふくらみが横から見えてしまいそうなのが、なかなかよかった。いや、罪深いことを思ってしまった。

視線が合うと、彼女はすぐに姿を隠した。照れ屋なのかもしれないし、こちらがあまり興味を引くようなものでもなかったせいかもしれない。

いいなあ、人馬。人間とは違う、こう、ほっそりした脚がいいよねとか思っていたら、迎えが来た。頭を下げて、興から降る。

挨拶しようとしたら、僕に布をつけるように指示していたイタデイスが、代わって口を開いた。背筋を伸ばし、剣を顔の前に掲げる。

「こちらはコフの戦の星、黒剣トウメスさまの弟君、フラメスさま」

おい、僕の名前が変わっているぞ。いつからフラメスになった。僕はフランだ。オウメスっぽい名前はよせ。いや、頭を下げなければ。ここで婚姻をぶち壊しても仕方ない。

こちらから物を頼む立場ゆえ、恭しく頭を下げる。とはいえ、奴隷のように頭を下げてはいけないという。

それにしてもフラメスか。母が僕に遺した唯一のものがフランっていう名前だったわけだが、それまで奪われた気がして腹が立つ。

「何故、布で顔を隠される？」

出迎えの集団の中で一番高い地位にあると思われる老人がそう尋ねた。

「かつての戦いで顔がひどく傷ついております」

イタデイスが素知らぬ顔で言った。おい、貴人は皆こうするんじゃないのか。

「そうか。さすが、トウメスさまの弟君だけはある」

いや、戦争なんか一度も行ったことないんですけど。

それにしても名前に顔に戦争経験、嘘に嘘を塗り重ねて大変なことになっている。口裏なんか合わせられるのかなと思いつながら、円形の屋敷に入った。石造りの家の中は涼しく、

過ごしやすそう。

この屋敷は中庭を囲むように建物が配置されている。中庭は立派で、最低限の軍事訓練は出来る規模を確保していた。なるほどなるほど、こうなっていましたか。

中庭を望む大きな窓がついた二階の部屋に案内される。当主はここで訓練を見ることができるといふわけだ。なるほど。

革張りの椅子に座って、当主を待つ。実務的な話はイタデイスが向こうの家宰かさいと話すだろうから、僕としては茶飲み話をするだけだ。トウメスの言う美しい姫君を見てみたい気もするが、こういう席には出てくるまい。

人当たりのよさそうなおじいさんがやって来て、葡萄の話をし始めた。ちよつと安心するような顔立ちの人で、貴族にしては人が好きそうだ。他家の事ながら心配になる。

しかも多種多様で微びに入り細こを穿うつての葡萄の話で、日照がどうか虫がどうか朝露が多めでどうしようとか、これはまた貴族としてかなり優秀な、というより、おっしゃることが専門的過ぎて、葡萄の生産者みたいな感じになっている。

僕も普段からオウメスの後ろに立っている関係で、葡萄の出来については相当詳しいつもりだが、ここまでではない。

「いやー。すごいですね。まるで実際に葡萄を作っておられる人みたいです」
そう言った瞬間、場が凍った。

ドアが少し開く。続きの間に控えていた人だろうか、腕だけ見せて、僕に手招きしている。ほっそりした腕。

どうということかと左右を見ていたら、どうぞあちらに、とおじいさんに勧められた。

続きの間へ。そこは最近改造されたのか石造りの傾斜になっており、そのまま中庭に続いてた。何をどうしてこうなったか、気になる。

僕を誘った細い腕の女性、というよりも少女を見る。一見して線が細い女の子だった。僕はこういう女性があまり好きではない。丈夫が一番、器量もよすぎては不幸になるだけだ。僕の母がそうだった。残念ながら彼女が丈夫ではなさそうで、ついでに器量がよすぎた。つまり、僕の趣味からは程遠い。

地味な黒い髪に宝石の髪飾り。貴族らしい格好が板についていて、こちらは貴族らしい貴族という感じではあった。

「すみません。実は、のつびきならない状況でして」

「いえ、こちらも申し訳ない。感想のつもりだったんです」

どうも老人は本当に葡萄の生産者さんだったらしい。つまりは、替え玉だ。

そして目の前の彼女がトウメスご執心のオルドネー嬢だろう。美人で控えめ。どうか。美人なのは確かだが、伏目がちな顔の下ではどんな考えがあるのか、分かったものではない。それで、僕は自分の趣味に今頃気づいた。どうやら、丈夫であまり器量がよくないこ

とに加えて、性格に裏表がないほうが好きらしい。これまでの人生がひどかったから、これくらいひねくれ方は許して欲しい。いや、誰の許可も必要ないのだけど。

オルドネー嬢は、伏目のまま、息を止めて考え事をしている様子。どうすれば、とかぶつぶつ呟いているのはやめたほうがいい気がする。

替え玉を出したことを失礼だと思った様子。まあ、でも僕も替え玉ではないにせよ、限りなくそれに近い何かだしなあ。

「あー。まあ、僕のお付きにはなんとなくうまくいこと話しておきますのでご安心ください。家の方にも黙っておきますから」

「え、え？」

今の言葉はあんまり美人らしくも貴族らしくもなかったかと、僕は少し笑った。

「秘密にしたいんでしょう？ 代役の事」

「と、取引でしょうか」

顔を赤くしてオルドネー嬢は言い出した。目は伏目のまま、横を向いている姿は世間一般ではかわいらしく見えるのかもしれないが、僕にはうかつなだけに見えた。

「いえ。僕、取引が嫌いなんです。必要なら真実と拷問の女神にかけて誓います。安心してくださる」

「オルー、どうなってる？」

下から元気そうな女の子の声が聞こえてきた。オルーとはオルドネー嬢のことだろう。

片目でオルドネー嬢を見ると、彼女はさらに失敗したかのような顔をしている。

あ、失敗なんだと思ったら、傾斜を人馬の女の子が上って来た。こちらはそう、完全に僕の趣味の女の子だ。人馬だけど元気そうで、不幸にもならなそうなくらいの器量だ。目が大き過ぎるんだな。

僕と目が合うと、親の仇を見つけたような顔をして突撃してきた。

ちなみに、人間が人馬の突撃を食らったら、死ぬ。相手が仔馬でも死ぬ。

死ぬときは物事がゆっくり見えてしまうもので、僕は思ったより冷静に動いていた。つまり、横に飛んだ。オルドネー嬢を抱いて横に飛べれば格好よかったのだが、無意識の事で自分だけ横に逃げてしまった。

幸いにもオルドネー嬢は狙われていなかった関係で無事だった様子。僕は転がって天井を見上げた状態で、自分の格好悪さに打ちひしがれていた。

なんだろうなあ。あそこで女の子を助けて死んだ、とかでもよかったんじゃないか。復讐よりもずっと美しく、ついでにジジウム先生も苦い顔はするけど許してはくれるだろう。別に生きていてもいいことはないし、屈辱を重ねるだけなのにこれだよ。肝心な時に自分だけ生き残ろうとするこの醜さ!!

僕が自己嫌悪でいっぱいになっている間に、人馬の少女は壁に掛けてあった青銅の剣を

取った。

「私の本気の実撃を避けるなんて、さすがは音に聞こえた勇士ね、トウメス。だがあなたは二つの失敗を犯した。武器を持ってなかったことと、もう一つは可愛い私の妹を手籠めにしようとしたことよ」

「イルケお姉さま、どっちも違います」

「うそ！」

人馬は前脚を持ち上げるほど驚いている。オルドネー嬢は自らの顔を覆った。

「本当です。あと、その方はトウメスさまの弟君のフラメスさまです。さらに言えば私たちの味方です……でした」

「あう」

失敗したときの反応が貴族らしくない。目の色も髪の色も種族も違うけど、そこだけは確かによく似ていた。確かに姉妹のようだ。

人馬と人間で姉妹とはどういうことだろう。馬と性交して子を作ろうとして成功した例はないから、当主は人馬と交わったんだろうか。基本的に性に奔放な多島海でも伝説級の特殊な趣味だ。

「あの、大丈夫でしょうか」

「大丈夫？」



姉妹揃って僕の顔を覗き込んでいる。

僕は起き上がった。僕は自分がずっと嫌いだったが、今度という今度は愛想がつきた。自殺しよう。せめて復讐するまではと我慢に我慢を重ねていたが、限界が来た。いざという時に女の子を助けられない、自分だけ助かろうとしたような僕に生きる資格はない。

「そ、そんなに怒らないでもいいじゃない!」

人馬イルケが怒り出した。僕の目を見てそう思ったらしい。

「イルケお姉さま、やめましょう。もう終わりです。最初からうまくいきつこなかったのです。この上は二人して潔く自害しましょう」

オルドネー嬢が涙ながらにそんなことを言い出した。演技、というより演劇のような動きと言葉だった。大丈夫だとは思うが、本当に自殺されて地下の国でうっかり再会したらバツが悪い。僕は自殺を少しだけ先延ばしして、抱き合っている二人を見た。

「大丈夫です、怒っていません。自己嫌悪しただけです」

「自己」

「嫌悪、ですか」

二人で言葉を分担するのはやめて欲しい。どっちを向けばいいのか分からなくなる。僕は文句を言おうとして、やめた。僕には文句を言う価値もない。

「さっき避けたとき、オルドネーさんを助け損ねました」

薔薇が咲くようにオルドネー嬢の顔が赤くなった。

「ちよっと、他人の妹を勝手に口説かないでくれる？」

人馬が怒って突つかかった。まったく元気で自分勝手、しかも物凄く美人というわけでもない。僕の好みなのに残念だ、怒らせてしまった。

「口説いていません」

僕はため息をついた。顔の布を外す。

「つまりはこういう事です。顔の傷なんて嘘。あなた方にも色々あるようだが、それは黒剣も同じです。どうぞ、好きなだけ化かしあいをしてください。僕には関係ない」

息を呑む音がして、姉妹を見返す。二人とも太陽を見たかのような顔をしている。

「な、なんで顔を隠していたんですか。そ、そんなに美しいのに」

美しいと兄に犯されますよとは思ったが、実際言葉にはできなかった。

「こんなものに意味はない」

「そ、そうよ。顔が綺麗だからって何？　ってね」

腕を組んで姉らしい人馬が言っている。まったくだと微笑んで、体についた埃を払った。

「ともかく、今日知ったことは誰にも言いません。あなた方に不利益は一切ないことはお約束します」

「なぜ、ですか」

オールドネー嬢は伏目がちに尋ねた。

「そういうことが嫌いだからです」

僕はそう答えた。

「貴族らしくないのね」

人馬イルケがそう返してくる。失礼な、そして真つすぐな言い方だ。嫌になれない。

僕は苦笑した。

「貴族も嫌いなんだ」

それで、屋敷を辞した。また輿に乗せられて帰る。走って帰りたい。いや、どこか遠くに行きたい。死にたい。自己嫌悪で胸が一杯だ。オウメスにどんな酷い目にあわされてもここまで心は傷つかなかった。いや、そもそもひねくれ者で罪に罪を重ねてきた僕が、こんな気分になるとも思っていなかった。

手が届かない距離で友達、ウラミやその妹を助けられなかったのは五〇〇〇万歩譲って仕方なかったと言えるかもしれない。少なくともあの時、僕は努力をしていた。叶わずとも動いて、しかし力で組み伏せられた。

でも手が届く距離で女の子を助けられなかったのは誰のせいでもない。僕の問題だ。悔しい。涙が出る。

ジジウム先生の言ったとおりだな。精神は自らの行為によってのみ穢れる。僕は自分の

身に降りかかった不幸を盾に精神を腐らせていた。

女の子の身の危険くらいは、迷わず助けたかった。

家に帰って死に方を考えていると、派手な音が聞こえた。壊したり割ったり、悲鳴があがったり、そういう音だ。戦争かなにかで踏み込まれたか、まあ、その死に方もありかなと思って部屋を出たら、暴れていたのは敵ではなく、トウメスだった。怒りに震えて自らの部下であるイタデイスを殴り倒している。

「どうしたのですか」

「どうしたもこうしたもあるか！」

僕まで怒鳴られ、殴られた。オウメスの鞭が可愛いほどの一撃で、僕は転がって意識が遠くなりかけた。驚いたことにイタデイスが立ち上がって僕をかばった。

「フランさまは関係ありませんね」

「関係あるものもあるか！」

ちと言葉遣いに教養を感じられない。怒鳴られるのは怖い、自殺を考えていたせいで、それほど怖くはなかった。トウメスは怒り狂っている。

「婚姻を断られたのだぞ。なぜお前が知らぬ！」

そりゃ僕に聞かせないようにしたせいでしょうと思うのだが、これはトウメスのせいではなく、イタデイスがそうしたことかもしれない。

「飾りとして置いておけと言ったのはトウメスさまですぞ」

イタデイスが言った。あ、やっぱりトウメスの自業自得か。

しかしまあ、結婚の申し込みを断るなんて、どういうことだろう。あの家、あまり豊かでないうえに当主に問題があるように見えた。娘の婚姻といえは貴族にとっての一番の稼ぎ時なのに、代役を立てるなんて何かあったのだろう。

で、あぐくに断る。トウメスの武勇や父の蜚行を知るなら、断ったら次の展開は分かるはず。断るにしても性急すぎるだろう。ヤニアの各貴族への根回しなどをやってからでないと、戦争に発展したとき困ることになる。

「どうしたのだ、馬鹿のような顔をして」

トウメスが僕の顔を睨みながら言った。

「いえ、断られるとは思ってもしなかったの」

僕がそう言うのと、トウメスは僕を殴るのをやめて、自室に引きこもった。黒髪の女奴隷を数名連れて行ったのはなんだかなと思うが、連れていかれるほうはまんざらでもない様子だった。

奴隷にも色々いる。だから奴隷反乱というのは大規模にならない。一つにまとまり切れないからだ。勇士に抱かれて箔がつくと思う奴隷もいれば、単に仕事を休めると思う女もいる。

それにしても、かつて女の匂いなどさせたこともない長兄だったんだが。

ため息をつく、自らの頬をさするイタデイスが僕の方に寄って来て頭を下げた。五〇も近い人に頭を下げられるとは思ってもいなかった。

「助かった。見事な口添えだった」

「いえ」

そんなつもりではなかった。考えがうっかり口に出ただけだ。

「こちらこそ、庇^{かば}ってくれてありがとうございます」

「何も知らさずに担^かいだしたのはこちらの事情。巻き込んですまなかった」

「いえ」

うちの家にまともな人がいたのは驚きだ。蚊帳^{かや}の外に置かれた件はあるにせよ、見直した。

しかしまあ、あの姉妹は大丈夫なのかなあ、と思いながら自室に戻り、自殺の準備をいそいそとしていたら、木材で目張りした外の窓がひつpegされた。

窓からイタデイスが顔を出してくる。

「急いで支度なされよ」

「どうして、ですか」

展開が速すぎてついていけない。イタデイスは僕の狼狽を無視して言葉を続けた。

「今しがた、ヤニアの小百合家より先ぶれが来た」

小百合家とは今日使者として行った貴族の家のことだ。

「あ、結局婚姻を受けることにしたんですね」

そう返したら、イタデイスは頭を振った。

「話は単純ではない。先ぶれは再度の結婚の拒絶と、代わって結婚の申し込みをしてきた」
よくわからない話だ。

「指定してきた婿の名はフラメス、つまりあなたのことだ。当然、トウメスは激怒するだろう」

「ちょ」

イタデイスは重々しく頷いた。

「あなたは間違いなく殺されるだろう」

オウメスが僕をかばって、兄弟で盛大な殺し合いとしかしてくれないかな。無理か。さすがのオウメスもこの展開は見通せまい。

「生き残る方法の一つだけだ。どうなさる」

「どうもこうも」

このあとオウメスから呼び出される前に自殺する予定だったのだが、予定が変わってしまった。ここで死んだら兄に責任を感じて死んだ弟の鑑になってしまう。それは嫌だった。

瞬きする間も与えずに、僕は口を開いた。

「逃げます」

「それがいいだろう。窓から出られよ」

昔と違って僕の背は少し伸びている。窓から出るのに難儀して、最後はイタデイスに引っ張られて外に出た。転がり出た先の地面には先客というか、オウメスが持っていた体格のいい奴隷が殺されて倒れていた。

「邪魔なので殺しました」

これだから武人は嫌いだ。僕に嫌味を言ったりする人だったけど、命令されたとはいえ怪我の治療もしてくれたんだよな。

「急ぎましょう」

せめて目くらはいは閉じさせてあげようと、僕はその顔に触れた。ウラミもこんな風に邪魔だから殺されたんだろうか。

立ち上がり、暗いなかイタデイスを見る。表情は分からない。僕を笑っているかもしれない。

「ありがとうございます。コフ市内では追手^{おって}が回るでしょうから、僕はヤニアに逃げます。イタデイスさんはどうされますか」

「私とて同じことです。海に逃げるとかでなければ、ヤニアに行くしかない」

それもそうか。それで、一緒に走ることにした。先づれが用件を伝え、それがトウメスの耳に入るまではおよそ一刻^{一五分}だろう。それまでにできるだけヤニアに近づかなければ。二人で走る。背にいくつもの松明^{たいまつ}の光が広がったのが一刻ほどした頃だった。今のところ読みは当たっている。トウメスは激怒して僕を殺しにかかっているというわけだ。いつかは殺しにかかってくるとは思っていたが、それが今日だとは思っていなかった。人生何が起きるか分からない。

再度後ろを見る。揺れの激しい光は馬の背に乗った松明だろう。

「どうなさる。馬の速度ならすぐ追いつかれますが」

イタデイスは冷静だった。それを僕に聞きますかと言いたいが、勇猛で知られるトウメスの下では逃げる経験なんてなかったのかもしれない。

「馬は道の上しか走れませんよ。馬が来るときだけ横に避けて、あとは道の上を進みましよう」

そう答えた。

イタデイスは面白そうだ。

「フランさまは胆力^{たんりょく}があられる」

「オウメスが狩り嫌いで、トウメスも不在が多いですから、猟犬を飼っていないのがよかったです」

ついでに新月の夜でよかったというところか。松明が敵の動きを教えてくれる。ヤニアの最高神の加護ってやつだな。新月は定期的に来るものだから、たまたまだけだ。

ともあれ馬だけをやり過ごし、僕たちは馬の追っ手を追いかけ、徒歩の追っ手から追いかけられるように走って逃げた。あきらめたか、前方、馬の追っ手が引き返してくるよう
に思えたので、また麦畑に隠れる。イタデイスに注意して、麦を踏まぬようにした。目ざ
とい者なら一瞬で麦の乱れに気付くかもしれない。

やりすごすのに時間はかかったが、一刻の差は大きかったか、僕たちは首尾よく走って
逃げることでできた。領地の境界を示す碑の横で息を整え、一休みする。まさか一日のう
ちに何度もこれを拝むことになるうとは。

「ヤニア領を侵犯はできないでしょう。まあ、今日のところは」
僕が言うといタデイスは頷いた。

「確かに、今日のところは」

ただ近日中には攻めて来るだろう。私戦になるか、都市国家として正式な戦争になるか
はまだ分からないが、攻めてくるのは間違いない。トウメスは女をあきらめられないだろ
う。そのところは、父にそっくりだ。

「ヤニアにつきましたけど、どうします？」

こんなことなら、ジジウム先生についていけばよかった。後悔でいっぱいだ。

イタデイスは歩きながら口を開いた。

「今回のことで愛想が付きました。三代四〇年に亘^{わた}って仕えてきたが、黒剣は駄目です。武勇と暴力、希望と現実、敵と味方の違いも分かっているように、到底貴族の当主などとは務まりますまい」

先ほどまで部下だったのに、まったくもって手厳しい限りだ。口調は冷静だが腹を立てているのかもしれない。それも当然だろう。

イタデイスは僕を見た。新月で表情などよくわからないだろうに、僕を見ている。

「若様はどうされます」

「若様って、今更そんな呼び方をしないで……。そうですね。あの姉妹というか、小百合家に行って事情を話して警告しようと思います」

先方としては考えた末、僕の方に娘を売りつけたのだろう。トウメスがどうしても嫌というのなら、この手しかない。長男の嫁よりも三男の嫁の方が格が落ちるが、家と家の争いや摩擦は避けられる。黒剣としても長男の嫁の座という札を残しておけるので、悪い話ではない。

オルドネー嬢本人の意志も少しはあったんだろう。知らない勇士より、少しでも話したところのある凡夫^{ぼんぷ}を選んだのかもしれない。

ところがそれが今、完全に裏目にでている。まあ、あの姉妹らしいと言えばあの姉妹ら

しい。

イタデイスは深く頷いている。

「なるほど。小百合家に入ってヤニアの助力を仰ぎ、家を奪還するのですな」
何を言ってるんだ、この人。

「いや、僕は……」

「復讐をしたいのではないのですか。ずっと、そう考えておられたのでは」

なんでこの人はそんなことを知ってるんだと、僕は震えた。これまでずっと、隠し通してきたと思ったのに。いや、隠し通してきたからこそ、生き延びてきたと思ったのに。

「いや、それは……そうですけど、なんでイタデイスが知っているんですか」

「知ってはおりませんが、想像はできます。境遇について小耳に挟んではおりましたし、今日見る限り、あなたは愚かではない。度胸もある。黒剣の血筋には珍しく、良識もおありのようだ。何より弁明しようともせずすぐに逃げることを判断したということは、普段演技されていたほど兄を信じておられるわけではないでしょう」

鮮やかな推理だった。トウメスの部下なので、頭が悪いと勝手に決めつけていた自分が恥ずかしい。年を取ればそれだけ賢くなるということだと素直に感嘆した。

頭を下げる。

「あ、はい。その通りです。すみません、僕はそういうやつなんです。母親や友達を殺さ

れて、それで復讐の機会をうかがってました」

「よいのではないでしょうか。お手伝いしましょう」

「いやいやいや、というか、なんでですか。僕なんかを手伝っても、いいことはないように思えますけど」

イタデイスは少し笑っているようだった。乾いた、そう、太陽神が仕事をしすぎた午後のように乾いた笑いだった。

「私の老後は今しがた消えました。まあ、それはいい。家族もうまく逃げていればよいですが、せがれは若様ほど聡明ではありませぬ。逃げるより誤解だと弁明しようとするでしょう。妻は息子の言うことを鵜呑みにするでしょうな。つまりは十中八九処刑されております」

「ちょ、僕を助ける場合じゃなかったじゃないですか」

「とはいえ、あの時家に帰っても助けられなかったでしょう。トウメスは、弁明を聞いて冷静に判断されるような方でもない。そんなことはずっと前から知っていた。知っていたのに何もできなかった、これは自業自得というものでしょう」

僕としては言葉がない。軽々しくこうすればとかああすればなんて言えないほど、冷静でよく考えられた意見だった。

イタデイスは困ったような声を出した。

「そんなに悲しそうな顔をなさらないでください」

「イタデイスは夜目^{よめ}が利くんですか？」

「いえ、これもまた想像です。だが、外れてもいないでしょう。帰り道、あなたは泣いておられた」

「あれは……」

「よもや縁談をまとめられなかったから泣いたのではありますまい。となれば、話は別だ。人馬の突撃を避けただけでも大したものですよ。ですがそれだけでは満足されていなかったのでしょうか。奴隷の死体にも配慮される若様のことだ。あの時オールドネーさまを助けようとされたのでは」

「見ていたんですか」

「あなたの監視が私の仕事でございました」

「そりゃそうか。いや、でも。」

「イタデイスは……いや、イタデイスさんは優れた人物なんです。びっくりしました」
僕の言葉は面白かったらしい。イタデイスさんは笑っている。ちょっと湿った、笑い。

「イタデイスで結構、若様。それでご相談なのですが、私も復讐の仲間に加えてくれませぬか。しかし、黒剣の当主やトウメスを見限ったとはいえ、黒剣そのものには愛着もあります。長年自分こそがあの家を育ててきたという自負もあります」

僕が何を言ってるんだこの人はと思う間にも、イタデイスさんは言葉を続けた。

「どうでしょう。あなたが黒剣の当主になるといいうのは。で、私が家宰をやる。悪くはないと思います」

「僕は復讐さえできればよかったんですが」

「それは若さですな。若様。ことを成せばその後があるものです。復讐のあとのことも考えて行動すべきでしょう」

「復讐が成功するとは限りませんよ」

「だが、失敗する気もないのではありませんか」

それはそうだな。恐れるべきは年寄りだな。僕は年寄りなんてジジウム先生以外はみな駄目だと思っていた。僕が間違っていた。

「もし、復讐を成したら、そのあとは奴隷に親切にしたいです。あと、難民を保護したいと思います」

イタデイスさんはどこか面白そう。

「それもいいでしょう。ですがその目標は、当面は口にすべきではありませんな」

「そうなんですか」

「正しいことを言えば敵になる者もいるものです。さしあたって余程信用できる者以外には、もっと欲深いその後のことを話すべきです」

「美女を集めるとか、ですか」

「美少年でもよろしいが。オウメスのように」

「自分で言っておいてなんですけど、あまり楽しそうな話じゃないですね。あー、そうだ。古代の文献を集めるのはどうでしょう」

そしてジジウム先生に好きな研究をしてみよう。

イタデイスさんは笑っている。

「変わり者ですな。いや、それでいいでしょう。土地や女は譲れなくても、古代の文献を譲れる者は多い。そういう話ならば手を組もうという者も多いでしょうし、若様がこれまで表立って出てこなかった理由にもなる。つまり、領土、女に興味はないと」

なるほど。と思ったが、随分と先走った話だ。

「まだ、逃げている最中ですよ、僕たち」

「たとえば老人でも、未来は楽しげなほうがいいのです、若様」